

業績表彰応募一覧（結果）

得票数	内訳		No.	課題	個人名/組織名	推薦者	概要	効果	該当事業種別					
	HP	1階掲示							発信・表彰	市民協創	チャレンジ	共育支援・移行	地域貢献	その他
19票	2票	17票	9	市長賞 いこまファーマーズスクールの開講	地域活力創生部農林課係	地域活力創生部農林課 課長 植島 秀史	コロナ禍でテレワークの導入や副業の解禁などの多様な働き方が広がり、生活様式が変化の中で「農のあるライフスタイル」への関心が高まっています。食・住・農を並列させたマルチワーク等で農業に取り組む新しいライフスタイルである「半農半X」を生駒で実現させるため、また、農業への参画を促進し、農地の保全と農業振興を図ることを目的として、いこまファーマーズスクールの開講した。	広報紙等で募集を行い、事業説明を兼ねたフォーラムを開催したところ、定数（15組）の5倍にあたる75組の応募があり、市民の農業に関する意識が高いことが分かったとともに、新たに農業以外のことを続けながら農業をはじめたい人に農業知識の習得と実践の場を提供することができた。 また、抽選から漏れた方を対象として学びの場も創設し、参画意欲の保持にも努めた。			○			
29票	3票	26票	2	市長賞 公民連携、市民・職員協創で子どもだけのフリーマーケット「いこマーケット for Kids」の開催	いこマーケット実行委員会 (SDGs推進課 吉村 寛志、健康課 (新型コロナウイルスワクチン担当) 吉村 奈緒、広報広聴課 村田 充弘、都市計画課 山崎 亮太、図書館 高田 叶子、農林課 飯口 貴也)	市長公室 公室長 増田 剛一	・コロナ禍が続き、生駒の子ども達のさまざまな体験の機会が奪われていることから、小学生の子どもを持つ職員夫婦が中心となり、生駒市職員自主研究グループ制度を利用して小学生以下の子ども限定フリーマーケットを令和4年3月27日（日）に開催。 出店者応募倍率6.5倍、1時間半で500人強が来場する市民ニーズに合致するイベントになりました。	・生駒の子ども達が小学生以下の子どもだけで実施するフリーマーケットの参加を通じて、社会・経済活動を実体験することにより、コミュニケーション力を高め、モノとお金を大切にすることを学び、SDGsを身近に体感する機会になりました。 ・樹南都銀行生駒支店、ココヨル、市民、市職員等の協力をいただき、公民連携及び市民・職員協創の機会となりました。			○		○	
167票	65票	102票	12	市民推薦賞 3つの「奈良県初」が爆誕！ ①バイオマスごみ袋 ②メルカリ教室 ③ごみ袋のレジ袋活用	市民部 環境保全課	市民部 環境保全課 課長 黒松 裕喜伸	①奈良県内の自治体で初めて、環境にやさしいバイオマスプラスチック使用の指定ごみ袋を導入 ②奈良県内の自治体で初めて、リユース推進のためメルカリ教室を開催 ③奈良県内の自治体で初めて、買い物した際に客が購入するレジ袋の代用として指定ごみ袋を1枚単位でバラ売りする取り組みを開始	①植物由来の天然資源を使用した指定ごみ袋を導入することで、温室効果ガスを削減し、地球温暖化防止に貢献（カーボンニュートラル） ②家庭ごみのさらなる削減を図り、不要な物をごみではなく資源として循環に廻す仕組み（リユース）を推進。デジタル利便性を享受したい市民から三桁の申込数 ③レジ袋削減による温室効果ガス削減と、袋原料費高騰の影響を受ける商店の支援。市長メールで届いた市民の声を実現し、期待に応える生駒市役所を印象付けた			○			
138票	14票	124票	22	市民推薦賞 公園の新しいシンボルを市民と共に決める取組「みんなの公園ワークショップ」 遊具選定アンケート	みどり公園課 公園係	みどり公園課 課長 河島 貴司	老朽化が進み更新時期を迎えた公園の遊具を順次更新しています。特に地域の公園のシンボルとなり得る複合遊具については、形式的に選定するのではなく、「みんなの公園ワークショップ事業」として、公園利用者や地域の声を遊具選定に反映するようアンケート調査を行いました。（R2年度から実施）	公園を利用する市民の直接の声を聞き、「見た目の華やかさより、遊べるパーツの多さを求めている」など、行政として市民が遊具に求めることの現実を知ることができました。また、投票により遊具を決定したため、多くの市民の想いを反映した遊具設置へ繋がりました。			○			
57票	11票	46票	25	市民推薦賞 地域園協働本部『えん・くろす』が始動！ ～子どもたちの豊かな体験・笑顔のために～	なばた幼稚園・依口幼稚園	教育こども部 次長 坂谷 操	令和4年度から、なばた幼稚園と依口幼稚園で、地域の方や保護者と幼稚園が協働し、子どもたちの豊かな体験活動や保護者のニーズに応えるプログラムの実現と園を活用し地域活性化を進めるモデル事業として、発足しました。	子どもたちが、ワクワクする豊かな体験ができ、地域の方との交流が深まることで、日々の生活においても、地域をより身近に感じようになりました。 地域の方と保護者が交流を深める機会となり、幼稚園が地域の世代間交流の場になりました。			○			
31票	19票	12票	4	優秀賞 市民PRチーム「いこまち宣伝部」が2022年度グッドデザイン賞を受賞	広報広聴課プロモーション係	広報広聴課 課長 大垣 弥生	生駒市の魅力的な人・店・行事・風景などを取材し、市公式SNS「グッドサイクスイこま」で発信する市民PRチーム「いこまち宣伝部」の活動が、2022年度グッドデザイン賞（主催：公益財団法人日本デザイン振興会）を生駒市で初めて受賞しました。	いこまち宣伝部は、2015年にスタートし、8年間で94名が参加、1,000件以上の魅力を発信してきました。現在は8期生12名が活動中です。取材先の選定から記事作成までを担当し、部員それぞれの視点で暮らしに根差した多様な魅力を発信しています。 継続的な活動を通して、部員同士やOB・OG、取材対象者など多くの人との関係が自然に育まれ、まちへの愛情や参加意欲・推奨意欲が醸成されていることが何よりの効果です。		○	○			
54票	11票	43票	8	優秀賞 地域未来人財育成事業「第2期いこまち未来Lab～まちとつながる、仲間と始める～」	地域活力創生部 地域コミュニティ推進課	地域コミュニティ推進課 課長 梅谷 信行	将来、地域や社会を担う高校生が、まちづくりへの関心と、協創する楽しさを学ぶ機会を提供し、自分が発想した企画、アイデアを具体的な形、事業化にするため、そのプロセスにおいて、地域の中で様々な分野で活躍する大人(市民活動実践者)とともに活動、体験、支援を通じて、市民活動を肌で感じ、事業への具体化と地域に対する愛着の醸成と新たな担い手の創出を目指す。	生駒に関心のある高校生17名、地域で活躍する大学生、社会人のメンターと一緒に、フィールドワーク等も行いながら、全5回のワークショップを開催し、高校生4グループで4事業を各地域で実施する。 【事業名】 ①チームikm/子育て世代どうしのコミュニティづくり応援 ②月見泥棒/笑和レトロ寺～地域に開かれたお寺～ ③ジビエラー/生駒の食卓にジビエを ④Books & Friends/人と本ともつながる持ち寄り図書館			○			
15票	0票	15票	21	優秀賞 公民連携による事業化に向けた新たな取組み ～学研高山地区第2工区～	都市整備部 拠点形成課 学研推進室	都市整備部 拠点形成課 課長 有山 将人	学研高山地区第2工区の早期事業化に向け、①公民連携による具体的なまちづくりの方針となる『学研高山地区第2工区マスタープラン』の策定、②基盤整備も含めたまちづくりへの豊富な経験を持つゼネコンやディベロッパーなどの「事業アドバイザー」や将来的に当地区に立地を希望する民間企業の募集、③国や県も参加する「事業推進会議」を設置するなど、事業推進体制を整えた。	・「事業アドバイザー」4者の決定、立地等検討企業10者のエントリー(R4.12時点) ・人口減少や多様化する働き方などを踏まえ、住宅中心ではなく、産業施設を中心に様々な機能を持つ複合的なまち『次世代の力になるまち』の実現に向け、大きな一歩を踏み出した。			○			
25票	0票	25票	26	優秀賞 知的障がい者への読書サポート事業	生涯学習部 図書館	生涯学習部 部長 八重 史子	誰もが読書を楽しみ、情報を得ることができる環境をつくるため、図書館の館内整理日(休館日)を知的障がい者が利用できる日とし、自由に読書を楽しんだり、本を借りられるようにするとともに、当事者の読書サポートをするためボランティアを養成し、読み聞かせや代読などを行ってもらう。これまで図書館を利用することが困難であった知的障がい者に、気兼ねなく本を読む機会を提供している。	毎月1回1施設(知的障がい者支援施設)当事者と施設職員の20～30名が、代読ボランティアのサポートのもと図書館利用されている。知的障がい者に対する読書推進に興味を持ってもらうことができ、12月からは、2団体に増え、また、放課後等デイサービスなどにも利用が広がっている。			○	○		

業績表彰応募一覧（結果）

得票数	内訳		No.	課題	個人名/組織名	推薦者	概要	効果	該当事業種別					
	HP	1階掲示							7	4	9	3	1	3
28票	6票	22票	1	月一のコーヒースタンド「Good Morning Coffee」	Good Morning Coffee	市長公室 公室長 増田 剛一	新型コロナウイルス感染症の影響で、職場にはパーテーションが設置され、会食が制限されるなど、以前より職員間のコミュニケーションが取りづらくなる状況です。そのため、職員同士で気軽に声を掛け合う空間を作るために、採用5年目～12年目の職員6人が毎月第3月曜日の出勤時間帯に庁舎1階ロビーにコーヒースタンドを設置。朝のコーヒースタンドをきっかけに、職員同士がつながるきっかけになることを目指しています。	若手から管理職まで毎月30人前後の職員が足を止め、コーヒーを飲みに来ています。コーヒーを淹れている間に、「最近どう？」と声を掛け合ったり、「今日は寒いね」など他愛無い会話を交わしたり、「うちの新採やよ」と自分の課の職員を紹介したりする姿も。中には「この取組を応援してるよ」と声をかける職員もいて、毎月の活動を地道に続けていることが職員の共感を呼んでいます。						○
54票	38票	16票	3	フォロワー3500人！「いこまタケ」のTwitterアカウント運用で生駒の魅力を発信	市長公室広報広聴課広報広聴係 にわかPR大使 いこまタケ/中の人（泉昂佑）	市長公室 公室長 増田剛一	・にわかPR大使「いこまタケ」が、イベント情報や生駒市が紹介されたメディア情報、地域の魅力をほぼ毎日ツイッターで投稿しています。 ・中の人一人。全長2センチの風貌と文末に「タケ」をつけたゆるく継続した発信が実を結び、フォロワーが3,500人の人気アカウントになりました。	・取材中に、「いこまタケのファンです」「応援してます」と声をかけられたり、投稿に応援コメントを寄せてもらえたりと、市民とのコミュニケーションのきっかけを創出しています。 ・Twitterのネタを探る視点をもってまちを見ることで、新たな気づきも増加。普段の広報業務に活用できているのも効果の一つです。	○					
12票	1票	11票	5	4年ぶりに開催！！令和4年度生駒市こども参観日	人事課（他課協力職員含む）	市長公室 公室長 増田 剛一	生駒市職員の子どもたち（小学生）を「一日体験職員」に任命し、親の仕事体験・見学する夏休み期間中のイベントです。この企画は平成27年度の職員提案で優秀賞を受賞した提案を実現したもので、今回は新型コロナウイルス感染拡大等の影響で4年ぶりの開催となりました。	○子どもたちが親の仕事を理解し、家庭での更なるコミュニケーションアップ ○職場内での子育ての理解を深め、仕事へのモチベーションの増加 ○子どもたちが仕事体験・見学を通じ、職業意識及び生駒市への愛着の醸成 ○新聞やテレビなどメディアで報道され、本市の取組みを広く世間に発信			○			○
4票	0票	4票	6	電子決裁システムの構築・運用	総務課	総務部 部長 杉浦 弘和	新型コロナウイルス感染症の拡大防止のための「新しい生活様式」を実践するため、本市においてもテレワークや電子申請等の取り組みを進めていたところ、そうした取り組みをさらに加速させるため、令和3年度に電子決裁システムを構築し、令和4年度から運用を開始した。	・メールによる照会等の事務手続きにおいて、紙に一旦印刷して決裁し、再度電子データにして回答するといった非効率な部分を解消できている。 ・当該システムは、文書管理機能も備わっていることから、電子決裁後は電子文書として保管されるため、紙の文書のような保管にかかる手間や検索にかかる時間を削減できているとともに、ペーパーレスの推進にもつながっている。				○		
41票	11票	30票	7	「交通事故のない安全・安心な生駒市」を目指せ	防災安全課	防災安全課 課長 南田 和佳子	「交通事故のない安全・安心な生駒市」の実現に向け、新型コロナウイルス感染拡大防止のため令和元年を最後に開催を見合わせていた「いこま交通安全大会」を復活・拡大させ、市民に「交通安全」を広く呼びかける「いこま交通安全フェスタ」を開催した。	従来、交通安全広報啓発の主な対象であった高齢者のみならず、子どもやその親世代への広報啓発により、より多くの市民、より幅広い世代の交通安全意識の向上につながった。 また、日頃地道な交通安全活動に取り組む市民ボランティアの表彰により「やりがい」を感じてもらうことで、今後の同種活動の継続・拡大を図ることができた。	○					
55票	13票	42票	10	コロナ・物価高騰により経済的打撃を受けた市内事業者への重層的支援	地域活力創生部 商工観光課 商工係	地域活力創生部 次長 岡村 匡祐	長引くコロナ禍と物価高騰の影響により市内事業者の多くが経済的打撃を受け、深刻な状況が続いている。そうした市内事業者を支援するため、①収入増、②負担軽減、③新たな事業へのチャレンジの3つの重層的支援策を実施した。具体的には、①「さきめしいこまプレミアムキャンペーン第3・4弾」「IKOMAマチナカマルシェ」②「物価高騰対策給付金」、③「チャレンジ生駒みらい資金」の計4つの事業を緊急的に実施した。	①さきめしいこまプレミアムキャンペーン：第3弾は開始から2ヶ月弱で完売。急速第4弾を追加実施。これにより5億2千万円の市内消費を創出。 Ikomaマチナカマルシェ：5,000人以上の来場者 出店事業者の約8割が満足の評価 ②物価高騰対策給付金：売上高に応じて7万～30万給付 給付総額は1億4千600万円 ③チャレンジ生駒みらい資金：コロナ禍の新たな取組に対し最大100万円補助 補助予算額3,000万円			○	○		
29票	18票	11票	11	国際交流イベント『いこま国際Friendshipフェスタ』を開催	市民部 人権施策課	市民部 部長 小林 弘幸	本市の多文化共生を推進する事業の一環として、『ふれる・ふれあう 世界のひとと文化』をテーマに、「生駒で暮らす・生駒を訪れる様々な国・地域と幅広い世代の人たちが気軽に出会い、世界の多様な文化を通して地域で身近に交流できる場」をコンセプトとして、住民参加型の国際交流イベントを開催。	本市で初めての大規模な国際交流イベントであり、文化体験を通して日本人市民と外国人市民だけでなく、外国人市民同士の交流や世代を超えた新たな交流が生まれ、相互理解を深める場となりました。				○		
26票	2票	24票	13	北地区の拠点となる障がい者支援施設を誘致し開設	障がい福祉課 幼保こども園課	福祉健康部 部長 近藤桂子	障がい児・者をもつ家族会からの北地区における障がい者支援の拠点整備の要望を背景として、農作業による障がい者支援を行っていた社会福祉法人（いこま福祉会）が模索していた北地区での新たな事業展開や未利用地となった旧高山幼稚園跡地の有効活用、地域住民のための広場整備要望など、これらの課題をうまくマッチングさせ、市が跡地を整備し法人の事業所誘致を行った。	・北地区における障がい者支援施設の拠点として活用（生活介護事業所「ひより」） ・運動場部分を地域住民の憩いの広場として整備。草刈り作業等は障がい者の作業の一環として実施 ・事業所による農業マルシェ、地域との交流会等を実施し、地域とのコミュニティの場を創出 ・外灯を新設し、夜間における地域住民の安全にも寄与			○	○		
15票	3票	12票	14	自宅療養者に必要な支援を！～自宅待機者・自宅療養者支援センターの運営～	自宅待機者・自宅療養者支援センター	健康課 課長 吉村 智恵	新型コロナウイルス感染症により自宅待機・自宅療養中の人に対し、買物代行などの生活支援、感染防止物品の配付のほか、増悪時の医療機関等の情報提供などを行っている。	令和4年3月22日の開設以降、支援を必要とする家庭に対し、977件（R5.1.11現在。情報提供件数を除く）もの支援を行っている。					○	
32票	1票	31票	15	新型コロナワクチンを適正に管理し、医療機関に配送	新型コロナウィルスワクチン管理・配送チーム	市長公室 公室長 増田 剛一	ワクチン接種業務の立ち上がり時期から、ワクチン供給という不可欠かつ重要な役割を経験豊富な再任用職員で構成するチームが担っています。 ・国から送られる複数種類のワクチンを受領し、マイナス80°の専用保冷庫で保管。 ・集団接種会場及び約40の市内医療機関のオーダーに応じ、配送事業者を通して接種場所にワクチンを配送。 ・衝撃に弱く、温度管理も難しいワクチンを適切に取扱いがら、市民のワクチン接種を支えています。	・配送したワクチン数は約18,000 ¹ 47ℓ、接種枠数は約12万7千回分です。 ・貴重なワクチンを無駄にすること無く適正に管理し、配送することで各地でのワクチン接種を円滑に実施することができました。						○

業績表彰応募一覧（結果）

得票数	内訳		No.	課題	個人名/組織名	推薦者	概要	効果	該当事業種別						
	HP	1階掲示							発信・表彰	市民協創	チャレンジ	災害支援・移行	地域貢献	その他	
									7	4	9	3	1	3	
9票	1票	8票	16	第2版奈2号橋予防保全補修工事の工期短縮	建設部 管理課 維持保全係 主任 銭谷 淳	建設部 部長 米田 尚起	生駒市内の橋梁の定期点検結果及び長寿命化計画に基づき順次予防保全補修工事を行っているところである。	橋梁の予防保全補修工事を行うことにより、市民に安心してインフラを共用していただく事ができる。	○						
13票	1票	12票	17	地域の主体的な取り組みによるコミュニティバス鹿ノ台線の実現！	建設部 事業計画課 交通対策係	建設部 部長 米田 尚起	高齢者等の外出機会の保障や様々な場所で活動できる環境整備の実現に向けて、活動時間に合わせた公共交通サービスの提供を行う。現状、地区内を中心を走るバス路線と競合しない場所や時間において、特定日に新たなコミュニティバスの導入が可能かどうか1年間の実証運行を実施し、持続的な公共交通サービスの提供を目指す。	近年、公共交通事業は事業者のみでの運営が厳しく、公共交通のあり方の転換が求められている。そのような中、地元が公共交通の導入に向けて取り組み、積極的な利用促進を行うことは、持続的な公共交通のあり方として新しいモデルになると考えられる。		○					
8票	2票	6票	18	新型コロナウイルス2次感染防止備品の配達及び買い物代行支援	都市整備部・建設部・健康課ほか協力職員	都市整備部 部長 北田守一	新型コロナウイルスにより自宅待機を余儀なくされた市民（希望者）を対象に、市職員が ①概ね1週間分の食料品や日用品などの生活必需品の買い物代行のうえ配達 ②2次感染防止備品を配達 ※令和4年4月以降は「自宅待機者・自宅療養者支援センター」で対応	令和4年1月～3月（オミクロンによる家庭内感染が増大した第6波） 買い物代行44件、備品配達238件（1日最大15件配達） ※取り組み開始の令和2年5月～令和4年3月までの累計 買い物代行50件、備品配達277件 ※令和4年4月以降は「自宅待機者・自宅療養者支援センター」で対応				○			
9票	2票	7票	19	生駒で暮らしそう。オンライン移住相談窓口	都市整備部 都市計画課 住宅政策室	都市整備部 課長 澤 ひろみ	住まい、子育て・教育、交通・買い物環境など、移住者が求める情報をワンストップで提供し、いこま暮らしを始める人を支援（2022年5月開設）	□相談件数 11件（内、3人がすでに生駒への移住を決定） □相談者の特徴 ・生駒での居住経験がない人の相談が大半を占める ・東京など近畿圏外からの相談も多数					○		
8票	2票	6票	20	生駒駅南口で始動！ 市民連携プロジェクト	都市整備部 拠点形成課 拠点形成係	都市整備部 拠点形成課 課長 有山 将人	・多様な「暮らし方・働き方」が叶う、次世代型住宅都市を目指す生駒市 ・生駒市の中心であり、宝山寺の門前町である生駒駅南口 ・しかし、空き店舗の増加など、賑わいや活力の低下を感じ始める近年・・・ ・そんな中、次の時代・これからの生駒市を牽引する「拠点づくり」を推進中 ・「まちの魅力を高めていこう」と、有志が集まり、市民が主役のまちづくりが始動	・市民約20名が、南口をフィールドにプロジェクトを実施 ・南口にある、既存ストックや公共空間を使いこなし、自身が楽しめる空間を創出 ・新たな動きは、「人と人」「人とまち」の繋がりを生む機会を創出 ・新たな繋がりは、新たな活動を生む起点となり、さらなる広がりの兆し			○	○			
30票	3票	27票	23	衛星画像解析（AI活用）による水道管の新たな漏水調査への取り組み	上下水道部 工務課	上下水道部 部長 岸田 靖司	全国的にも活用事例が少ない調査手法である、衛星画像を用いたAIによる水道管の漏水調査と解析を行うことにより、通常では発見できない地中での漏水を発見し、早期の修繕に繋げることで、有収水率の更なる向上や、経費の削減等を図ることを目的として、県下では初めてその導入に取り組んだ。	通常業務では、市内全域を南北に分け、2か年で漏水調査を行っているが、衛星画像とAIによる診断を行うことで、数か月で市内全域を一度に調査解析することができ、調査期間の短縮や経費の大幅な削減につながった。また、今回の調査結果として、市内で177箇所もの漏水可能性箇所を発見するに至った。					○		
13票	3票	10票	24	ICT教育アワード経済産業大臣賞（主催：全国ICT教育首長協議会）、キャリア教育連携推進表彰優秀賞（主催：経産省・文科省）を受賞	生駒市の小中学校 教育子ども部教育指導課教育政策室	教育子ども部 部長 奥田 吉伸	企業から与えられたミッションに対して提案を行う「オンライン職業体験」や地域の情報を集めた地域魅力発信アプリ「にしょロポくん」、小学校9校合同で行った「福島県の被災地と繋ぐ防災教育」などの取組が現場の教員と教育政策室が相談しながら、ボトムアップで推進した点を評価され、ICT教育アワード経済産業大臣賞を受賞。さらに、「にしょロポくん」のプロジェクトでは地域や大学との連携が評価されキャリア教育連携表彰の優秀賞を受賞。	教員たちの「やりたい」を叶える手段としてICTを活用することで、学校現場での導入が促進された。また、実施した取組を「目的」「利用ツール」「授業の流れ」「感想」等をまとめてカタログ化し、note（ブログ）や教員向けの研修で共有。その結果、複数校での合同提案が当たり前となり、他校の事例を参考にして外部との連携を実施する学校も増えた。					○	○	
23票	4票	19票	27	悲願達成！生駒市救助訓練隊が全国消防救助技術大会陸上全7種目に出場！	消防本部 引揚救助訓練隊	消防署署補佐 消防吏員 辻本 英彦	本市消防本部の引揚救助訓練隊が発足して、これまで多くの隊員が挑戦しても叶わなかった全国消防救助技術大会（以下「全国大会」という。）出場を今年度見事果たした。 生駒消防引揚救助訓練隊は第35回奈良県消防長会消防救助技術指導会において4チーム中1位入賞の成績を取め、奈良県代表として出場した第46回消防救助技術東近畿地区指導会においても15チーム中1位入賞の成績で全国大会に出場した。	今回、引揚救助訓練隊が全国大会出場を果たしたことで、生駒消防は陸上全7種目で全国大会出場を果たしたこととなり、この偉業を成し遂げた消防本部は全国的にも少なく、その効果は職員士の士気向上のみならず、他の本部からの評価も含めて一定の価値を示してくれた。					○		
19票	6票	13票	28	魅せた！生駒レスキュー隊の実力！消防救助技術東近畿地区指導会で技術訓練を披露	消防署 特別救助隊	消防署署補佐 消防吏員 樋口 秀樹	第50回消防救助技術東近畿地区指導会において、東近畿地区の7府県（69本部）の代表本部として、資機材や訓練要領等を定めて救助隊の創意工夫のもと訓練想定から救助方法までを行う「技術訓練」を披露した。	この技術訓練は、資機材の選定や救助方法等、従来の救助方法にとられない新たな救助方法の提案が行われるものです。この訓練展示は「生駒型救助手法」としてSNSや消防機関紙を通じて全国の消防本部に発信され、生駒市消防本部特別救助隊の救助技術力の高さを広めた。					○		
20票	6票	14票	29	第50回全国消防救助技術大会においてロープブリッジ渡過で入賞	消防署南分署警備第2係 消防職 大宮 晃一	消防署署補佐 消防吏員 杠 敦史	第36回奈良県消防長会消防救助技術指導会の「ロープブリッジ渡過」において1位入賞し、奈良県の代表として第50回全国消防救助技術大会に出場した結果、入賞を果たした。	市民を守る消防職員として、その技術を競う救助技術指導会において優秀な成績を取ることで市民の安心を確保し、他の隊員の士気向上の一助となった。					○		